テアル２形式（能動型と受動型）における話者の認識

原　沢　伊都夫

【要　旨】

本稿では、統語的に異なる２つのテアル形式が使用される背景について、テイル形と比較しながら、話者の認識という観点から考察する。発話の時点（基準時）が現在であると限って言うと、過去から現在までの状態の継続について、客観的な継続の事実を描写する場合はテイルが、継続の事実を動作の結果として伝える場合はテアルが使用される。そして、テアルによる動作の結果は、行為志向性の能動型（～ヲ　テアル）と対象志向性の受動型（～ガ　テアル）とに分かれる。能動型は、動作主による意図的状況が実現されていると認識される場合に使用され、何らかの目的のために保たれた準備的状況を表す。これに対し、受動型の使用は、目の前に広がる光景の中から人為的変化を話者が認める場合であり、動作主は特定される必要はない。このことから、両者における意図性には大きな相違があることがわかる。つまり、能動型では、動作の時点での意図がそのまま結果状態に反映されているのに対し、受動型では動作主が特定されていないため、その意図を知るすべはない。それよりも、話者がその結果状態をどのように判断するのかによって意図性の有無が決定されるのである。

【キーワード】能動型　行為志向性　受動型　対象志向性　意図性

１．はじめに

テアルは、統語的に二つの形式に分かれる。動作主が主格で対象が対格に現れる能動型と対象が主格に現れる受動型である。能動型では何らかの準備的状況が実現していることが示され、ある目的のために動作が遂行されたことを意味する。これに対し、受動型では動作によって生じた結果状態に焦点が当たっており、状態の変化が重要なポイントとなる。

１）夕食は、寿司を注文してあるので、大丈夫だ。
２）そのベンチはペンキがぬってあった。

いずれも「動作の結果」という言葉で言い表すことができるが、両者には大きな相違がある。例文１）に見るように、能動型においては対象に変化がおきる必然性は必ずしもあるわけではない。それよりも、ある目的のために「寿司を注文する」という行為が遂行されたことが重要視される。動作主はもちろん特定されていて、この例文であれば話者（１人称）であると考えることができる。これに対し、例文２）では、動作主は特定されていないが、動作の結果は目に見える形で話者に認知されている。受動型では、動作の結果が対象の変化という、目に見える形で現れる必要があるのである。益岡は、このような両者の

特徴を、行為志向性と対象志向性と呼んでいる。つまり、能動型では行為志向性が強く、受動型では対象志向性が強いということになるだろう。本稿では、このような統語的に異なる２つのタイプの基本的な使用について、話者の認識という観点から考察したいと思う。

２．能動型／受動型使用の背景

話者が能動型でもってある事実を表現するとき、ある目的のために動作が行われたということを事前に知っている必要がある。例えば、「太郎は先生を夕食に招待してある。」という文であれば、太郎が何らかの目的でもって先生を招待したという事実があり、話者はそれを知っているから表現できるのである。そのような情報が無のままでは、この表現は不可能であろう。前項でも述べたように、能動型では動作の結果が必ずしも目に見える形で生じているわけではないので、結果状態から話者が判断することはできない[1]。したがって、能動型使用においては、意図的行為の実行を事前に知っていることが前提となり、その結果、話者と動作主が一致する確率が必然的に高くなる。その場合、動作主は省略されるのが普通である。

３）花を生けてあるので、見ていってください。
４）その部屋は鍵をかけてあるので、誰も入れません。

筆者の持っているテアルの資料によれば、能動型において話者と動作主が同一人物である確率は、54％になる[2]。このように、能動型テアルにおいては動作主の特定が前提条件となっており、その中でも話者と動作主の一致の割合は非常に高くなっているのである。

動作主が特定された結果状態はテイルによっても描写されることがある。例えば、

５）私は３日ほど前にその花を生けている。

などである。この場合、原沢（2005）で指摘しているように、目的意識の伴わない単なる結果の継続状態はテイルによって表現される。先の例「太郎は先生に夕食を招待してある。」であれば、「太郎は（すでに）先生を夕食に招待している」という文がこれにあたる。このように、ある目的のための準備的状況にあるテアルと単なる客観描写のテイルという使い分けがここでは行われているわけである。

これに対し、受動型では事前の情報はまったく必要とはしない。話者が目にした情景を眼前描写的に表現するのである。そこで重要となるのが、変化である。話し手がある情景の中で変化を認知したとき、さらにその変化が誰かによるものだと判断したとき、受動型が使われる。この場合、テアルの意図性の有無は話し手と聞き手の判断にゆだねられる。例えば、乱雑に散らかった部屋の中に足を踏み入れた話者が、引き出しが開いているのを見て、その状態に何らかの意図性を感じて、

６）引き出しが開けてある。

と言ったとする。その場合、果たして聞き手がその表現から意図性を感じるかどうかはわからない。つまり、「引き出しが開けてある」という表現だけでは意図性が伴うのか、伴わないのかが聞き手には不明なのである。もし話し手の感じる意図性を確実に聞き手にも伝えたいのなら、それをサポートするような状況を提示する必要があるだろう。例えば、

7）おかしいなあ、閉まっているはずなのに、引き出しが開けてある。

などといった表現がそれである。反対に、意図性が伴わない状況とは

8）窓が開いていて、机の上も汚れている。引き出しも開けてあって、中には丸めた紙が無造作に放り込んである。

などにおける表現であろう。これらの例から、受動型テアルは、意図性が伴う場合も伴わない場合もあることが確認できる。これについてはすでに、杉村（1998）や原沢（2005）が詳しく論じているが、一言で言うとテアル受動型は意図性との共起が可能な動作の結果を表すと言えるだろう。

３．テアルの意図性

このような意図性との共起が義務的ではない受動型に比べ、能動型における意図性は本来義務的である。すでに見てきているように、動作主が意図的に行った動作の結果を保持しているのが能動型であり、話者は動作主自身かそのような意図的動作を知りえる者に限られる。したがって、能動型使用においては、受動型に見られるような意図性の選択が話し手にも聞き手にも残されていない。動作主の意図的な動作によって生じた結果状態を表すのが、テアル能動型なのである[3]。

このような観点でもってテアルの意図性を再考すると、面白い事実に気が付く。それは、能動型がもつ意図性と受動型がもつ意図性には大きな相違があることである。能動型の意図性は、動作の時点での意図と一致しており、テアルが描写する結果状態には動作主の意図がそのまま反映されている。例えば、

9）快適に過ごすためにホテルのスイートをとってある。

というテアル文であれば、動作の時点での意図、ここでは「快適に過ごすため」という目的がそのまま結果状態にも続いているのである。これに対して、受動型の意図性は動作の時点での意図とはまったく無関係である[4]。話し手は動作を引き起こした本人でもその事実を知る者でもなく、目の前に広がる光景の中から、ただ単に動作の結果であろう事実を眼前描写的に表現するのである。例えば、次の例文では、意図性がある場合とない場合の両方が考えられる。

10）机の上に弁当が置いてある。（わざと？　忘れて？）

したがって、仮に誰かが意図的に行った結果であっても、話者にそのような意図性が認知されない限り、意図的なテアルとしては表現されない。このことから、テアル受動型に伴う意図性は話者の認識次第であると言えるだろう。

テイルとの関係で言えば、目の前に広がる光景を客観描写するのがテイルであり、動作の結果として見るのがテアルである。ここで注意しなければならないことは、テイルが描写する事実は、動作による変化も作用や自然現象などによる変化も含まれるということである。目の前に広がる光景をもたらした原因は何であれ、それらを客観的に描写するのがテイルの役目なのである。したがって、変化をもたらした原因は動作でも作用でも何でもかまわない。これは、このような両者の原因を暗示する表現との共起が可能であることから見ても、明らかである。

11）風が吹いたようだ。（開けておいた）ドアが閉まっている。（作用による結果）
12）誰かが来たようだ。（開けておいた）ドアが閉まっている。（動作による結果）

これに対して、動作の結果だけを描写するテアルでは、作用による結果は表現できない。

13）？風が吹いたようだ。（開けておいた）ドアが閉めてある。（作用による結果）
14）誰かが来たようだ。（開けておいた）窓が閉めてある。（動作による結果）

ここで再度、意図性という観点から考えると、テイルは状態の客観描写であるために、動作の結果であっても、目的を示す表現とは共起しない。

15）？話し声が聞こえないように、ドアが閉まっているようだ。

もちろん、作用による結果も意図性と共起しないのは明らかであろう。

？話し声が聞こえないように（風が吹いて）、ドアが閉まっているようだ。

これに対し、テアル受動型における意図性との共起はすでに確認しているところである。

16）話し声が聞こえないように、ドアが閉めてあるようだ。

これらのことから、テアル受動型は目の前に広がる光景の中から、動作による変化だけを拾い上げているという点で、客観的な事実描写的なテイルと比べて、主観的であり、有標の表現であると言うことができるだろう。

４．日本語教育の観点から

これまでの考察を日本語教育の実践面に応用してみると、初級の段階では、受動型から導入するのがいいだろう。これは、受動型と能動型の出現率が７対３の割合で、圧倒的に

受動型の表現が多いからである。導入は、多くの教科書で紹介しているように「自動詞＋ている」と「他動詞＋てある」を一緒に行うのがいいだろう。その場合、「自動詞＋ている」は単なる客観的な描写を、「他動詞＋てある」は誰かによってもたらされた結果の描写という対立で教えるのが効果的である。英語であれば、“The window has bee (is) open”（テイル）と、“The window has been opened”（テアル）という例で示すとわかりやすいかもしれない。

17）窓が開いている／窓が開けてある
18）電気がついている／電気がつけてある
19）椅子が並んでいる／椅子が並べてある

この場合、テイルは非意図的、テアルは意図的という説明は避けたほうがいい。自他の対立のないテアルの場合、意図性の伴わないことが多々あるからである。

20）電車の網棚の上に傘が忘れてあった／置いてあった。

もちろん、有対他動詞であっても、意図性の伴わないものもある。

21）その辺に無造作に服が脱いであった。

したがって、最初に「テアル＝意図的」と教えてしまうと、学習者が将来そのような先入観からなかなか抜けられなくなる可能性がある。

初級では、自他の対立の中でテアルを教えるが、中級においては、自他の対立のない他動詞＋テアルの例を導入しておく必要がある。これによって、必ずしも意図的ではないテアルの用法にも触れることになる。実際このようなテアルの使用率はテアル全体の41%であることが、確認されている[5]。

テアル能動型については、中・上級レベルで導入すべきであると考える。この場合、意図的に引き起こした準備的状況をあらわす表現として、紹介する。初級で教えるテアル受動型とは異なり、明確に行為主を意識した表現として教える必要があるだろう。その場合、「～を～ておく」を導入し、テオクは準備の動作を、「～を～てある」は準備の動作が終わっている状況を表現する、という比較で教えると、理解しやすいかもしれない。英語だと“I will order some pizza in preparation”と“I have ordered some pizza in preparation.”ということになる。多くの初級教科書で、「～を～ておく」と「～が～てある」を一緒に導入しているが、意味が似ていて認識が異なるため、学習者を混乱させる可能性が高い。能動型と一緒に教えることで、そのような混乱をなくすことが予想される。

5．おわりに

今回の考察では、統語的に異なる２つの形式が使用される背景について、話者の認識という観点から概観した。発話の時点（基準時）を現在であると限って言うと、過去から現

在までの状態の継続について、客観的な継続の事実を描写する場合はテイルが、継続の事実を動作の結果として伝える場合はテアルが使用される。さらに、テアルによる動作の結果は、行為志向性の強い能動型と対象志向性の強い受動型とに分かれる。動作主による意図的状況が実現されていると認識される場合、能動型が使用される。そこでは、なんらかの目的のために保たれた準備的状況を意味することになる。これに対し、動作主の意図性とは別に、目の前に広がる光景の中に人為的な変化を認める場合、受動型が使用される。その場合、テアルに伴う意図性の有無は話者の認識によるものであり、動作の時点での意図性とはまったく別のものである。これについて、テイルと比較すると、その違いが分かりやすい。

（1）対象に重点がおかれた表現
　① テアル受動型（行為の結果）
　　窓が開けてある。
　② テイル（何らかの結果の中立描写）
　　窓が開いている。

（2）行為に重点がおかれた表現
　① テアル能動型（意図的な行為の結果）
　　私は子供の入学祝いに寿司を注文してある。
　② テイル（行為の結果の中立描写）
　　私はもうすでに寿司を注文している。
　③ テオク（準備的な行為）
　　私は寿司を注文しておく。

このことから、日本語教育においては、まず対象に重点が置かれた表現から導入し、中級・上級になるにつれて、行為に重点が置かれた表現に移行していくことが望まれる。特にテオクは対象に重点が置かれた表現と一緒に提示されることが多いが、行為志向型であることから、能動型と一緒に教えていくのがより効果的ではないだろうか。

注

(1) 能動型でも、結果状態から推測して使われることもある。
　　きっとあいつが窓を開けてあるんだ
　しかし、本論では、上記のように特別な状況ではなく、ごく一般的な特徴について言及している。
(2) テアル能動型 85 例のうち、46 例が１人称である。
(3) 非意図的な能動型も原沢（2005）で報告されているが、ここでは能動型の基本的特徴という意味で説明している。
(4) ここでも、もちろん動作の時点での意図と結果状態の意図が一致する場合も考えられる。例えば、話者が動作を行ったにもかかわらず、受動型で描写する場合があるから

である。

窓が開けてあるからね。閉めないでね。

(5) 原沢（2005）による。

参考文献

原沢伊都夫（1998）「テアル形の意味―テイル形との関係において」『日本語教育』98号

原沢伊都夫（2002）「理論と実践の結びつき―テアルの表現形式から―」『静岡大学留学生センター紀要』第１号

原沢伊都夫（2005）「テアルの意味分析―意図性の観点から―」『日本語文法』５巻１号

Cognition in the use of the two types of Japanese Resultative

HARASAWA, Itsuo

The − *tearu* construction in Japanese describes a situation that has resulted from a previous action and bears two syntactic structures known as the Passive Resultative and the Active Resultative. With the Passive Resultative one is usually interested in the Patient, which is marked with the nominative *ga*, while the emphasis with an Active Resultative, in which the Patient is marked by the accusative *o*, is on an action done for some purpose. Semantic analysis of the Resultative is generally conducted on the basis of these two fundamental structures. In terms of a speaker's cognition, the Passive Resultative is assigned when the speaker perceives an ascertainable change in state caused by someone, whereas the Active Resultative is used when the speaker becomes aware of the agent's purposeful action. In teaching Japanese, it is common practice to introduce the − *tearu* construction along with − *teiru*, which also describes a resultant state. That is to say, an intransitive verb + *teiru* describes a non-volitional situation, while a transitive verb + *tearu* (i.e., the Passive Resultative) is used to express volition. This explanation is, however, not always correct since the − *teiru* construction may often describe a resultant situation deliberately brought about by someone, and the − *tearu* construction may indicate a non-volitional situation. Based on the study of 537 − *tearu* examples collected from 27 essays and novels published between 1976 and 1998, I conclude that this construction describes a change in state that the speaker feels is caused by someone, while − *teiru* describes a neutral state as it is viewed irrespective of its causer. Given proper contexts based on this characteristic, learners can be led to understand and use the Passive Resultative as clearly distinct from the − *teiru* construction.

In the meantime, the Active Resultative may be taught along with − *teaoku*, which also refers to a preparatory situation. The former indicates a situation where an action

has been done for some purpose, while the latter simply describes a preparatory action. It would be reasonable for both forms to be taught at intermediate or upper levels, after the learners have acquired the basic usage of the Passive Resultative.